

した最初の音楽家と言えるだろう。

いい曲であろうか。同じ年、スタックスも創業した。——それは歴史の偶然か、必然か。

SRM-T1

Driver Unit with Vacuum-Tube
Output for Earspeakers

¥80,000

真空管のアンプがいまだに使われているのはなぜかと言えば、音がすばらしいから——と答えるしかないだろう。では何故、音が良いか——という問いに答えるには若干の知識を要求される。



即ち、真空の中を電子が動くのと半導体の中を電子が動くのでは真空中のほうがスムーズに移動できそうであろう。また一般に、真空管を使った回路のほうが、シンプルに設計しやすいという事も音の良さに貢献している。真空管を使ったアンプは暖かい音がするというのも考えてみると面白いことではある。スタックスでは回路に使われる素子一つ一つが音に影響を与えることから、素子そのものの改良に取り組み、特に抵抗についてこれまでとは発想を異にした特別製の抵抗をメーカーとの協力で完成した。くわしくは説明できないが、タンタルという極めて安定な、しかも磁性体を含まない金属をベースにした抵抗体を使っていることをご記憶願いたい。スタックスの進めている磁性体の排除というテーマに沿ってシャーシーの材質も安価な鉄ではなくアルミ合金を使っていることも特筆すべきであろう。また内部の配線にPC-OCCを使っていることは、いうまでもない。もちろん音質向上に貢献している。真空管が温まるまで待てない——という方の為に、プリヒート回路を設け、スイッチONですぐの音出しも可能である。アウトプット端子も230Vのノーマルバイアス1つとプロバイアス(580V)

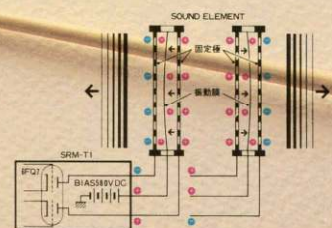
が2つ用意され旧タイプのイヤースピーカーとプロシリーズのイヤースピーカーの比較はもち論、プロシリーズのイヤースピーカー2台を同時に鳴らすこともできる。

回路構成はSRM-1/Mk2シリーズと同様、AクラスDCであることも覚えておいて頂きたい。

これは動きたい時に即座に動きだせ、止まりたい時にすぐ止まれるからに他ならない。この事は即、音になって現れる。実際聴いていただくのが最も良い説明となろう。



1ミクロンの誘惑。



●イヤースピーカーの動作原理

振動膜と言う言葉はダイナミック型ヘッドフォンではめったにお目に掛からない。それは、ダイナミック型ヘッドフォンでは薄くても6ミクロンが限度だからである。

ではなぜコンデンサー型は薄く出来るのか？その秘密は振動体全面にユニフォーム(均一)に力が加わる構造だからである。左図を見ていただくとお解りいただけると思うが振動膜をはさんで2枚の電極が並行におかれているが、振動膜にあらかじめ直流電圧(SR-Σ Professional, SR-Δ Signatureの場合580V)を加えておき、両側の電極の片側に+、もう一方がーになるような信号を加えると、(冬にシャツを脱ぐ時に発生する

のと同じ)静電気力で、片側からは引っ張られ、もう一方からは反発力を受けて振動膜が動き出す。この時、力を受けるのが膜全体同時であるため、一部が盛り上がりだったり、一部がへこんだりということが起こらない。従って振動体は薄く軽くできる。——ではなぜ軽いほうが良いか？これは動きたい時に即座に動きだせ、止まりたい時にすぐ止まれるからに他ならない。この事は即、音になって現れる。実際聴いていただくのが最も良い説明となろう。